

「アプリアリな綜合判断はいかにして可能か」
 ということについて

常 俊 宗三郎

一

カントが形而上学の可能性を検討する規準として「アプリアリな綜合判断はいかにして可能か」と問うたのは周知の通りである。この規準に則って、カント以前の形而上学は独断論的であって、形而上学を形而上学本来の軌道に乗せることができていないとして断罪し、将来建設されるべき自然の形而上学や道德の形而上学の基盤を築き上げることができると考えた。カントの「理性批判」はこれらの新しい形而上学の予備学であり、「アプリアリな綜合判断はいかにして可能か」という間に収約されるのである。いうまでもなくアプリアリな綜合判断とは \wedge アプリアリ \vee と \wedge アポストリオリ \vee という二分法と \wedge 分析的 \vee と \wedge 綜合的 \vee という二分法との組み合せから組み立てられたものである。前者は知識が経験に由来するか否かということにかんするものであり、後者の二分法は判断が知識を解明するだけのものかまたは知識の拡張をもたらすものであるのかの区別についてのものである。もちろんこうした知識にかんする二分法的な思考法はカントによって初めて唱えられたのではなく、カント以前にもライプニッツの \wedge 理性ないし

は永久の真理 \vee と \wedge 事実の真理 \vee あるいは \wedge 必然性の真理 \vee と \wedge 偶然性の真理 \vee の二分法やヒュームの \wedge 観念間の関係 \vee と \wedge 事実の事柄 \vee の区別にもみられ、カントもいうように、さらに溯ればロックによっても同様な試みは示唆されており (Prolegomena § 3) '古典的となっていたといつてよい。とはいえこの区別を哲学の根本問題として、認識論ないしは知識論ばかりでなく、存在論やさらには人間のあり方についても反省を強いる広い展望の下に提言したのはカントに始まる。とりわけこうした二分法にかんするカントの哲学の特異性は、一つの二分法でなく、二つの二分法を説き、それらを組み合わせて、アプリアリな総合判断を独自の発見として唱導したことにある。このカント哲学の特異性が独創であったといえるかどうか。アプリアリな総合判断なるものが擁護されうる考えであるかどうかは、カント以後さまざまに論じられてきた。そしてカントのこの見解にたいして否定的な評価を下すが、現在にいたるまで趨勢となつていたといつてよい。すなわちライブニッツやヒュームの一つの二分法に帰るのが大勢を占めてきたのである。

これまで専ら \wedge 判断 \vee という言葉を使つてきたが、カント自身 \wedge 命題 \vee とか \wedge 認識 \vee とかの言葉も使い、 \wedge アプリアリな総合命題 \vee とか \wedge アプリアリな総合認識 \vee とかといういい方もしている。カント以後むしろ \wedge 命題 \vee ないしは \wedge 言明 \vee という言葉が通常用いられるようになる。そこでカント以後大勢を占めるにいたつた考えを \wedge 命題 \vee という言葉を使って表現すると次のようになる。アプリアリな命題はすべて分析命題であり、分析命題はすべてアプリアリな命題であるとされ、アポストリアリな命題はすべて総合命題であり、総合命題はすべてアポストリアリな命題であるとされた。こうした見解が抱かれる転機となり支えとなつたのは、分析命題の分析性がすべて論理学の一般法則と定義によつて規定できるという考えである。この考えはおそらくフレーゲに由来する⁽¹⁾。もっともフレーゲ自身は分析命題がすべてアプリアリであると考へたけれども、アプリアリな命題がすべて分析命題であるとしたわけではない。カントと異なり、算術の命題はすべて分析命題であると考へたけれども、カントと同様フレーゲも幾何学におい

てはアプリアリな綜合命題のあることを認めたからである⁹⁾。それはともかく分析性を論理法則と定義によって特色づけられるという考えが一般に受け入れられるところとなり、アプリアリな綜合命題を認めるフレーゲの見解を不徹底として、 \wedge 分析命題 \vee と \wedge 綜合命題 \vee という一つの二分法を採用することが既定のこととされるにいたった。こうした考えはラッセルなどの経験主義者やカルナップなどの論理実証主義者のような多くの人々により、推進され支持されてきたのである。

ところで分析命題の分析性を規定する \wedge 定義 \vee は、論理学や数学などの精密な学問分野においては厳密になすことができる。それは言葉や記号を簡単にすることだけを目的として、明示的な約束によって新しい表記法を導入するにすぎないからである。「三直線によって囲まれる図形」を \wedge 三角形 \vee の定義としたり、「重さを体積で割ったもの」を \wedge 密度 \vee の定義としたりするのがその卑近な例である。けれどもそうした厳密な定義は日常の自然言語においてはまづみられない。むしろ定義は通常同義性を前提としてなされる。ところがその \wedge 同義性 \vee を正確に定義化することはたやすいことではないのである。そこでクワインは分析性という言葉に根本的な質疑を提出し、分析言明と綜合言明との境界線を引く二分法そのものが成り立ちえないとしてこれを斥けた。そうした区別を設けることができるということは、経験主義の非経験主義的ドグマであり、形而上学的信条であると断言したのである¹⁰⁾。クワインによると諸言明は全体として一つの体系をなしており、その中心部には科学の高度の抽象理論があり、その周辺部は事実と直接につき合われる諸言明から成るというゆるやかな区別があるにしても、個別的に切り離された綜合言明があつて、それが個々別々に経験的に真偽の判定がなされるといったものではないのである¹¹⁾。こうしたクワインの考えにたいしてもさまざまに反論されてきた。実際、同義性の正確な定式化が確立されていないからといって、クワインの主張するように、分析性と綜合性の区別そのものが存在しないと極論することはできないであらう¹²⁾。それはそうだとすても、とにかく \wedge 分析的 \vee と \wedge 綜合的 \vee の二分法が盲信されるべきものでなく、再考され吟味されなおしてよいとす

る情勢を作り出したことは確かである。

△アプリオリ \checkmark と△アポストリオリ \checkmark 、ないし△分析的 \checkmark と△総合的 \checkmark という二分法に現在さらに問を投げかけているものとして、数理哲学における経験主義の復興と様相論理からの問題提起を挙げることができる。数学基礎論における論理主義や形式主義のプログラムの遂行途上での躓きによって、数学を演繹体系として根拠づけることに疑問が抱かれ、むしろ数学の形式的な理論は、物理理論のような非形式的な理論によって偽似経験的にテストされ、さらにこの非形式的な理論を介して経験的に間接にテストされるという見方が唱えられるようになった⁽⁶⁾。こうして数学のすべての分野で⁽⁷⁾、分析性やアプリオリ性を一面的に強調することに見込みのないことが認識されるにいたっている。

また様相論理においては、△アプリオリ \checkmark と△アポストリオリ \checkmark の認識論上の二分法のほかに、これと区別して△必然的 \checkmark と△偶然的 \checkmark の二分法が存在論上不可欠として提起され、「キケロはトゥーリーである」のような偶然的同一性言明がどうして可能なか、ないしはそうしたアプリオリな必然的言明の可能性が問われている⁽⁸⁾。

他方カントの思想的モチーフと同一とはいえないにしても、アプリオリな総合判断の存在を唱える考えも皆無であつたわけではない。数学基礎論における直観主義者ブラウアーが、カントの時間直観のアプリオリ性の考えに思想的根拠を求めたのは周知の通りであり⁽⁹⁾、また思想的立場からして当然のこととはいえ、新カント派の碩学カシラーもラッセルやクレーチェラにたいして、カントのアプリオリな総合判断の歴史的意義を擁護した⁽¹⁰⁾。さらに現象学の創始者フッサールが、カントのアプリオリな総合認識を、アプリオリな領域存在論における実質的領域の公理として解釈しなおし、別個の思想的展望を開示している⁽¹¹⁾。

以上のように知識の二分法にかんするカント以後の思想的展開を回顧するとき、カントの「アプリオリな総合判断はいかにして可能か」という問は、もはや過去の遺物として、一顧だにされなかつた状況とはいささか異なる趣きを呈してきているといつてよい。少なくともいたずらに流行の思潮に棹さして、過去のすぐれた問題提起を解決済みの

「アプリアリな綜合判断はいかにして可能か」ということについて

一六

ことと速断するような態度は改められるべきであろう。もちろんアプリアリな綜合判断についてのカントの考えがすべてそのまま現在に生かしうるというのではない。しかしカントが「アプリアリな綜合判断がいかにして可能か」と問うたとき、それをどのような視座から問題提起していたのが吟味されるべきであり、その問は歴史的にどんな意義をもち、またもってきたのか、あるいは現在の視点から未だどれほどの意味をもちうるのかを検討されてよい。以下このような観点から、カントの「アプリアリな綜合判断はいかにして可能か」という問題をとりあげることにした。

二

カントは形而上学の可能性を問うにあたって、素質としての形而上学と学としての形而上学を分け (B. 21~22)⁸¹、素質としての形而上学について次のようにいう (A. X)。「人間の本性にとって無関心でいられないような対象の研究にたいして、無関心を装わんとしても無駄である。無関心であると称する人も、……どんなところでも、ただ何ごとかを考えるかぎり、それほどまで侮蔑を申し立てていた形而上学的主張に逆戻りせざるをえない。」すなわち素質としての形而上学は現実存在する (B. 21)。しかしカントの「弁証論」によると、素質としての形而上学に身を任ねることは、弁証論、仮象の論理に捲き込まれざるをえない (Prolegomena § 133~4)。他方、学としての形而上学は、数学や物理学のような確実な道を歩むことができなかつた。すなわち学としての形而上学が現実存在するということは承認できな (Prolegomena § 4)。そこで「形而上学はいかにして可能か」という問は、「素質としての形而上学はいかにして可能か」という問と「学としての形而上学はいかにして可能か」という問に分けられる。つまり人間はどうして本性上形而上学的ならざるをえないのか。しかもどうして弁証論を免れえないのか。また人間は本質上

形而上学的なのに、形而上学はこれまでどうして学として形成されえなかったのか。こうした問題を論究する手がかりとして、カントは「アプリオリな総合判断はいかにして可能か」という問を立てたのである。というのは数学、物理学、形而上学という理性による一切の理論的な学には、アプリオリな総合判断が原理として含まれていると考えたからである。カントによると、数学的命題はすべて本来的にはアプリオリな総合判断であり、物理学もアプリオリな総合判断を原理として事実含んでいる⁸⁰。他方形而上学においても、アプリオリな総合判断が含まれているはずであるが、そうした認識が未だ実現されていない。つまり形而上学はその目的にかんしてのみアプリオリな総合命題から成っているにすぎないのである (B. 18)。そこで数学的認識や物理学の認識と形而上学的認識と称すべきものは、どのように異なるかが問題となる。数学や物理学が確乎として抜くべからざる信頼を得てきたのに、何故形而上学は長い歴史を積み上げてきたにもかかわらず、未だ甲論乙駁、動揺常ならざるをえない状態にあるのか。それは形而上学の主題や対象が可能的経験を越えたものであるということながら、カントによるとりわけ数学や物理学と形而上学との認識方法の差異にある。だからこそ「アプリオリな総合判断はいかにして可能か」を論じる『純粹理性批判』は方法についての論書であり、この批判の本務はこれまでの形而上学の営為を变革することであるとされたのである (B. XXII)。では数学や物理学と形而上学との方法の違いはどこにあるのか。

さて『純粹理性批判』の「先験的方法論」の中で、哲学的認識と数学的認識を対比して次のようにいわれている。『哲学的認識は概念による (aus) 理性認識であり、数学的認識は概念の構成による理性認識であるが、概念を構成するとは概念に対応する直観を呈示する (darstellen) ことである』(B. 741)。この両者はまた概念による (nach) 論証的な (diskursiv) 理性使用と概念の構成による直観的な (intuitiv) 理性使用として対比され (B. 746)、『哲学的認識は特殊を普遍においてのみ考察し、数学的認識は普遍を特殊において考察するともいわれる (B. 742)。しかるに形而上学的認識とはこの哲学的認識のことなのである (Prolegomena § 1)』。したがって形而上学の認識方法も概

念による論証的な理性使用であり、特殊を普遍において考察するということで特色づけられる。それでは概念による論証的な理性使用とはどういうことなのか。それはたんに概念を分析することにあるのではない。概念の分析も多大の認識を与えてくれる。だがそれは概念のうちで曖昧な仕方ではあるがすでに考えられていることを解明し説明することにしかならない。それは概念を拡張するものではなく、これを分解してみせるだけである (B. 9)。一言でいえば概念の分析は分析判断をもたらずだけなのである。カントは一七六三年の論文、『自然神学と道徳の原則の判明性について』において、哲学的認識の第一の務めを概念の分析にあると考えていた。しかし形而上学の本来の目的は分析的な認識ではなく、アプリアリな綜合認識にある。とはいえこれまでの形而上学はアプリアリな綜合認識を実現していない。「形而上学を独断論的に実現せんとしてこれまでなされてきた試みはすべて、行なわれなかったものとなしうるし、また見なざるをえない。実際あれこれの形而上学において分析的に行なわれたこと、すなわち概念の分析は、……本来の形而上学の目的であるどころか、それへの準備にすぎない。本来の形而上学はその認識をアプリアリに綜合的に拡張することであり、概念の分析はこうした役には立たない。というのは概念の分析は概念に何が含まれているのかを示すだけであって、……どうしてそうした概念があらゆる認識一般の対象にかんして妥当に使用されるのかを規定できないからである」(B. 28)。カントはこれまでの形而上学と本来の形而上学を区別し、本来の形而上学的判断は、すべてアプリアリな綜合判断であるというのである (Prolegomena S. 2. C. 3)。先に言及した一七六三年の論文においても概念の分析のみが、哲学の仕事と考えられていたわけではない。形而上学は未だ綜合的な手続きで営まれるべき時期に達しておらず、まず概念の分析に手掛け専念すべしというのである (II, S. 290)。しかしここでは形而上学がどのようにして綜合的な手続きで営まれうるかについての何の示唆も与えられていない。ところが一七八一年の『純粹理性批判』では、概念によって論証的にアプリアリな綜合判断が可能とされるのである (B. 747-8)。

ところで \wedge 概念による論証的な認識 \vee というときの \wedge 概念 \vee とはいかなる概念なのか。また \wedge 論証的 \vee とはどのようなことを意味しているのか。いうところの概念とはもちろん家とか犬とかの経験的概念ではなく、たとえば物一般というアприオリな概念である⁸⁸ (B. 748)。こうした概念のアприオリな直観は与えられない。それは個々の対象ではなく、対象一般にかかわる概念だからである。そこでこうした概念やこれに関係する綜合命題は先験的といわれる⁸⁹ (B. 748, 750)。ここで先験的概念といわれているのは『先験的原理論』では、純粹悟性の根本概念としてのカテゴリーのこと(ただし量のカテゴリーは除く⁹⁰)であり、またその派生概念といわれた (B. 671-8) のことである。これらの概念に関係するアприオリな綜合命題とは純粹悟性の原則ないしはこれらから派生したアприオリな綜合命題のことである。もちろんこうしたアприオリな概念による認識によって、實在の対象の経験的直観が与えられるわけではない。それによって与えられるのは、経験的直観によってアポストリオリに与えられる多様を綜合する規則だけである。経験はこの規則によって、したがってまた綜合的原則によって初めて可能となる。逆にいうと先験的な概念は、アポストリオリに経験を介してつまり間接的に呈示されるのである (B. 748-9)。形而上学的認識の特性とされた、概念による論証的認識とは、本来的には概念の分析にあるのではなく、アприオリな概念が経験を可能にする所以を論証することにある。いかえるとそれはアприオリな概念や命題を間接的とはいえ、経験によって呈示することである。この論証や呈示はどのようにして行なわれのか。形而上学のアприオリで綜合的な認識はどのようにしてなされるのか。それは「先験的演繹論」で答えられる。それでは先験的演繹論とはどういうことなのか。これを見るに先立ち、カントが伝統的な形而上学の主題をどのように受けとめたか、ということについて言及しておきたい。それはとりもなおさず先験的演繹論をカント哲学の全体的特性の中に位置づけることにもなるからである。

三

先に伝統的形而上学が確實な道を歩むことができなかった理由は、カントではその方法上の欠陥に帰せられるといふ。だがいうまでもなく一般に方法と主題や対象とは相即したものであり、切り離しがたい関係にある。したがって伝統的形而上学の方法上の欠陥とは、その方法がその主題や対象に不適切だったことにあるともいえよう。伝統的に形而上学の主題とされてきた、神の存在、人間の魂の不死や自由といった問題は、可能的経験の領域を超出しており、理論的には答えられない。それはカントによると、存在が実在的述語ではなく、人間の心のあり方が実体的には考えられず、また自由は同一平面で考えられると、因果法則に矛盾するからである。そうした問題に理論的解答を求めるなら、仮象の論理に陥らざるをえないのである。これらの問題はむしろ実践的・道徳的な問題領域に属する。いならずらに思弁を弄して、超感性的な領域にまで立ち入ることは、理性の使用を拡張することにはならず、実践的・道徳的な問題をそれ固有のあり方で追求する姿勢を抑圧し、かえって理性使用を狭窄せしめることになるであろう (B. XXXV)。そこでカントは信仰に余地を残すために知識を取り除かなければならないと考えたのである (B. XXX)。

こうした理論と実践の分離の考えによって、カントの生涯における哲学の展開が飛躍的に前進せしめられることになった。一七七〇年の教授就任論文『感性界と可想界との形式と原理について』においては、超越性的なものについて悟性的実在的使用による認識が可能とされていた。『純粹理性批判』に至る十余年間、荆棘にみちた批判の小径を歩むことから得られた成果の一つが、理論と実践の分離という考えであった。けれどもそれだけでは『純粹理性批判』は比類のない人類の遺産の一つとはならなかったであろう。カントは形而上学の問題を実践的・道徳的領域にのみみたのでなく、自然についても形而上学の課題が存していると考える。

カントによると自然についての日常の経験はもちろん⁹⁰⁾、自然科学すら形而上学的前提を含んでいるとされる。そこでカントが自然科学とくに物理学の公理や定義は自然の形而上学をまっけて初めて説明され解明されるという所以を取り上げてみよう。物理学の理論たとえば慣性の法則や作用と反作用の法則は、ニュートン物理学の公理とされる。カントによればそれらは因果の原則や相互性の原則によって哲学的に根拠づけられる。たとえば慣性の法則「あらゆる物体は外力によって、その状態を変えられないかぎり、その静止の状態ないしは直線上の一樣な運動の状態を続ける」は、逆にいえば「物体のあらゆる変化には外的原因がある」ということを含意しており、後者は「一切の変化は原因と結果を結合する法則によって生起する」という因果の原則によって説明されうる⁹¹⁾ (IV. 543~4)。また質量保存則のような物理学の基本原理は、実体の持続性の原則によって哲学的に根拠づけられる。すなわち質量はニュートンでは物質量といわれ、カントによると物質量とは実体という面からいえば、物質を成立せしめている実体の集合にほかならない。したがって質量の保存とは物質量が物質の変化においても増減しないということであり、これは「現象がどんなに変易しようとも、実体は持続し、その量は自然において増減しない」という実体の持続性の原則によって説明されるのである (IV. 541~2, B. 224 usw)。こうした物理学の公理や原理、またそれらに含まれている諸概念の解明は自然の形而上学に属し、実体、因果、相互性などの原則やそれらに含まれている諸概念の解明は一般形而上学に属する (Vgl. IV. 541~4)。物理学も自然の形而上学や一般形而上学を前提し、これらを欠くことができないのである。「自然科学者が科学にたいする形而上学の要求を拒けるのは正しいけれども、無意識的であったにしろ、かれらも形而上学の原理を用いたし、また用いざるをえなかった」 (IV. 472)。科学理論には形而上学的な背景があるという考えは、一部の科学史家の常識であったとはいえ、クーンのパラダイム理論でも唱えられ、近年新たな脚光を浴びるにいたったのは周知の通りである。カントの自然の形而上学は、ニュートンの物理学には、実体や因果の形而上学的世界観が含蓄されているということを露呈してみせているのだと解することができる。ただカントの場

「アブリオリな総合判断はいかにして可能か」ということについて

合に問題となるのは、実体や因果が変更不可能な人間のアプリオリなカテゴリーであるとすると強いアプリオリズムにある。その正・否はともかく、科学の成果を採り入れた科学的技術的な日常経験は言うに及ばず、科学以前の日常経験にもまた、そうした強いアプリオリズムに基づく形而上学的世界観が支配しているとされるのである。

さて以上のような形而上学的原理は、経験的でないアプリオリな原理にすぎない。それらが特殊科学の原理や公理に関係づけられるためには、直観的に具体化されなければならない。そうした原理やそこに含まれている概念の直観化は、まず数学によってアプリオリになされる。このアプリオリな直観は空間と時間であるとカントは考えた。「先験的原則論」によると、空間・時間によって概念を直観化するのは、概念を外延的に量化することでもある。カントは純粹悟性の第一の原則、量の原則を \wedge 直観の公理 \vee と名づけ、「直観はすべて外延量である」(B. 202)がその原理であるという。また「先験的図式論」では、概念を形象化する一般的手続きの表象を図式であるといい、量の図式は数であるとする(B. 183)。すなわち概念を具体的個別的な事例に適用するさいの第一の一般的手続きは、数を介してなされるのである。これら \wedge 原則論 \vee と \wedge 図式論 \vee で説かれていることを重ね合わせると、アプリオリな形而上学的原理が特殊科学の原理や公理と関係づけられるためには、数量化されなければならないということになる。そこで「特殊科学はすべて、そこに数学が適用されうる程度によって本来の学が含まれる」(IV. 470)とカントはいうのである。

自然法則は、どれということなくすべて、悟性の一層高い原則に従う。しかしそれは自然法則によって、ただあの原則が現象の特殊なケースに適用されることによるのである(B. 198)。科学は経験と形而上学の橋渡しとなる。科学は形而上学的原理にもとづくとはいえず、経験と何の関係もなければ科学の名に値しない。科学が科学たりうるためには、経験による裏づけがなければならない。いうところの経験とは究極的には感性的経験つまり感覚である。ところで感覚は主観的なものである。しかし感覚の対象となる実在的なものは質的なものであるけれども、それはやはり量

をもつ。そこには内包量すなわち度がある。純粹悟性の第二原則、質の原則は∧知覚の予料∨と名づけられ、その原則は「一切の現象において、感覺の対象となる実在的なものには、内包量すなわち度がある」(B. 207)となっている。内包量も外延量と同様連続量である (B. 211)。感覺の対象となる実在的なものはなるほどアポストリオリにしか与えられないけれども、それらが連続的な度をもつという特性はアプリアリに認識される (B. 218)。それだからこそ、聞き取れない音とか、感じられない音とか、見分けられない色や色合の差異とか、ということが意味をなすのである。それはたんに、ある人には聞き取り、感じ、見分けられなくとも、他の人には聞き取り、感じ、見分けられるということではない。誰れにも聞き取れない音や感じられない温かさや見分けられない色や色合というものがあると、アプリアリにいうことができる。だからこそ視覚や聴覚などの感度ということが問題にされうるのである。すなわち感性的經驗の対象となるものもアプリアリな原理によって規定されうる側面がある。そこから内包量も、たとえば温かさが温度として計量化されるように、外延量に関係づけられることによって数量化されるのである。感覺そのものは質的断続的であり、そうしたありのままの感覺にのみ目を向けていたのでは、こうしたことも不可能であろう。

これまでみてきたように自然科学が可能となる根拠として、いくつかのアプリアリな原理がある。そうしたアプリアリな原理は、特殊科学が体系的に構築されるさいに、それと意識されることがなくとも、暗々裏に含蓄されているのである。「自然科学の純粹な部門では、形而上学的構成と数学的構成とが、たがいに交錯しているのが知られる」(IV. 473)。ところで∧純粹な部門∨といわれるときの、∧純粹∨とは經驗的なものを一切含まないということである (B. 3)。したがって自然科学の純粹な部門とはさしあたっては物理学の理論的な側面のことと理解できよう。しかし特殊科学においては原理的な側面のほかに、実験的な側面がある。これは究極的には感性的經驗にもとづく。逆にいえば実験や観察における感性的經驗によるテストを通して、実験法則が組み立てられ、こうした実験法則のいくつかを考慮し、これらとつぎ合わせながら理論が構築される。このような実験法則や理論の構成のそれぞれの段階で、

いくつかの異なるアприオリな原理が支配しており、それを解明するのが形而上学の任務であるとカントは考えたのである。「学をして学たらしめるためには、異なる原理はたがい区別し、それぞれの原理を特定の体系たらしめることはきわめて重要である。こうしてそれらの原理を使用するさいに生じうる制限なり、ときには錯誤がいずれの原理に帰せられるべきかを十分に区別できないという混乱から生じる不確実性を防ぐことができる。……自然科学の純粹な部門について、形而上学的構成を、またこれらの概念の構成の諸原理、したがって数学的自然論自身の可能な所以の諸原理をも同時にあわせて、一つの体系として叙述することが必要である」(IV. 472~3)。経験論の誤りはこうしたアприオリな原理を見落したことにある。他方形而上学はアприオリな学であるが、それは経験を無視して成り立つのではない。カント以前の独断論的形而上学の誤りは、経験の教えるところをことごとく見下し、概念だけに留って独善的に思弁を展開したところにある(B. XIV)。カントのいう新しい形而上学は経験と無縁に進められるのではない。むしろ経験を主導し、経験をして経験たらしめるところにある。「疑いもなく形而上学は種々の可能性をほしいままに考え出し、直観の中におそらく何も示されず、ただ自己矛盾を冒していないということのほかには、その客観的実在性については何の承認も得られない概念をもてあそぶことだと解された。しかし本来の形而上学は……経験から得られたものでないからといって、決して捏造されたものでなく……経験の多様をはじめ合法的に結合し、この多様を経験的認識つまり経験たらしめることのできるアприオリな概念やアприオリな原則を含むものである」(IV. 472)。ではどうしてアприオリな概念や原則は、経験をして経験たらしめ、経験の多様を経験的認識たらしめるのか。カントのいう形而上学的なアприオリな概念や原則はどのようなにして経験との連関がつけられるのか。

現代の科学哲学の通説では、理論概念と実験概念とに一定の対応づけがなされ、そうした上で理論から実験法則が理論的に演繹可能となるということによって、理論は実験法則を介して間接的经验的に裏づけられる。カントも形而上学的アприオリな概念や原則と経験との関係づけを演繹ということとで考える。しかし論理的演繹としてでなく、先

驗的演繹という独自の考えを提示したのである。それは一言でいえば経験ないし経験の対象がアプリアリな概念によって初めて可能となる所以を示すことである。これは経験やその対象がアプリアリな概念によって構成されるという考えを基にしてなされる。それは経験を反省することによって概念が経験から得られる仕方を示すこととは異なるというより、むしろ逆の方向の手続きであるといつてよい。カントは後者の手続きを経験的演繹と呼ぶが、経験的演繹は概念がどうして手に入れられたかという事実を問題とするだけである。これにたいして先驗的演繹は概念が経験ないしは経験の対象を成り立たしめるという合法性の問題にかかわる。先驗的演繹と経験的演繹との関係は、法學上の權利問題と事實問題とにかんする立証になぞらえられるのである (B. 116 usw.)。實際へ演繹√という言葉を、カントは法律用語から借用したと明言している (B. 116)。それにしても何故カントは演繹を論理的演繹という哲學上なじみの概念によってでなく、先驗的演繹という殊更新奇な概念によって考えたのかと問われてよい。恐らくその解答は概念と直觀の多様つまり現象とが異種のものであつて、両者にかかわる命題間の關係を論理的演繹の關係として考えられないということにあるであらう。そこで両者を媒介するものとして図式論が説かれるのである。「図式は悟性概念が使用されるさいの感性的条件であり、原則とはこの条例の下で純粹悟性から生じるアプリアリな綜合判断である」(B. 175)。こうした図式や原則の成立は、綜合の働きである構想力に負うとカントは考へる。「図式は構想力の先驗的所産であり、いわば構想力のプログラムである。個々の經驗的形象はこの図式によってまたこの図式に従つて、初めて可能となるのであつて、つねにこの図式を介してのみ概念と結びつけられざるをえず、それ自体で概念と完全に合致することはない」(B. 181)。演繹が論理的演繹でなく、先驗的演繹として考えられ、しかも演繹論を補完するものとして図式論が説かれるのは、概念と直觀の異種性ということにあり、演繹論や図式論の成立根拠として構想力の媒介的機能に訴えられるのである。先にも記したように、科學哲學において理論概念と實驗概念の間に対応規則ということが説かれるのも同種の問題として考へることができよう。

「アプリアリな綜合判断はいかにして可能か」ということについて

さてアプリオリな概念が経験や経験の対象と連関をもつのは、概念によって経験や経験の対象が構成されるからである。経験から概念が得られるのでなく、概念が経験を成り立たしめるというカントのこの思考法の転換はカント自身コペルニクスが天動説から地動説へと思考法を転換したことになぞらえた(B. XVI~XVII) ことにより、後にカントのコペルニクスの転換として讃称されるようになった。こうした思考法の転換が可能となったのは、対象の方に向うのでなく、認識の仕方に反省的に目を向け、対象の成立の如何を問うという構えを採ったからである。カントはこの反省的なあり方を先験的と称する。「対象にかかわる認識ではなく、われわれが対象一般を認識する仕方にかかわる一切の認識を先験的と名づけるのである」(B. 25)。それ故カントの哲学は先験哲学とも呼ばれる。だがカントは自身の哲学を先験哲学とは称しなかった。先験哲学とは純粹理性の一切の原理の体系であるが、理性批判はアプリオリな綜合原理を洞察するに足る範囲に限って展開されているにすぎないからである。そこでカントは理性批判を先験哲学そのものではないが、先験批判とか先験哲学の考案 (Idee) とかい、その意図するところは認識の拡張ではなく、認識の分析、修正であり、学説ではなく、オルガノンの準備であり、また形而上学そのものでなく、それへの予備学であるとしたのである(B. 25~8)。カントのこうした控え目な発言にもかかわらず、カントの構成説的な発想はすでに分析とか予備学につきるものでなく、綜合的な営為を含んでおり、形而上学そのものとなっているのは明らかであろう。

さて以上によって「アプリオリな綜合判断がいかにして可能か」ということが、自然科学や形而上学においてどのように考えられているのかを知ることができた。すなわち自然科学の公理や原理それ自体は、経験から帰納的に引き出されるものというより、人間悟性の創造的活動により割り出されたものであるという点でアプリオリであり、それにもかかわらずそれらが経験的認識の構築を可能ならしめ、認識の拡張をもたらすという点で綜合的である。これと同様形而上学の原則は、純粹悟性のアプリオリな概念から、空間・時間のアプリオリな直観を介して取り出されると

いう点でアプリアリであるにもかかわらず、物理学の法則や日常経験を成り立たしめる根拠となるという点で、認識の拡張をもたらした総合的である。ところで初めて記したように、カントによると数学の命題もアプリアリな総合命題である。それでは数学における△アプリアリな総合判断∨とはどういうことなのか。従来、数学の命題は論理学の命題と同様、分析命題であるというのが通説となつて、カント説の重大な欠陥がもつたらこの点にありとされてきたのである。数学がアプリアリな総合判断から成るといふカントの真意はどこにあったのか、次にこのことを取りあげて論じてみた。

(末了)

註(1) Vgl. G. Frege; Die Grundlagen der Arithmetik §3.

L. Couturat; Les Principes des Mathematiques, p. 246, n.

J. Hintikka; Are Logical Truths Analytic?, Knowledge and the Known, p. 155 n. 1.

(2) G. Frege; *op. cit.*, §13, 14, 89.

(3) W. V. O. Quine; From a Logical Point of View, p. 37.

(4) *op. cit.*, §6. Empiricism without the Dogma, p. 42 ff.

(5) *cf.* H. P. Grice and P. F. Strawson; In Defence of a Dogma, Philosophical Review, p. 141 ff.

(6) *cf.* I. Lakatos; A. Renaissance of Empiricism in the Recent Philosophy of Mathematics §4, Philosophical Papers, vol. 2, p. 354 ff.

H. Putnam; What is Mathematical Truth? Philosophical Papers, vol. 1, p. 60 ff.

(7) 例えは初等群論などは例外である。このことを完結した厳密な演繹的展開が可能である。

(8) S. Kripke; Identity and Necessity, Identity and Individuation. ed. by M. K. Munitz, p. 135 ff.

Naming and Necessity, Semantics of Natural Language, ed. by Davidson and G. Harman, p. 253 ff.

(9) L. E. J. Brouwer; Intuitionism and Formalism, Philosophy of Mathematics, ed. by P. Benacerraf and H. Putnam, p. 66ff.

「アプリアリな総合判断はるかたじけなく可能か」といふことについて

「アプリアオリな綜合判断はいかにして可能か」といふことについて

二八

- (10) E. Cassirer; Kant and die moderne Mathematik, Kantstudien, Bd. XII, S. 1, usw.
(11) E. Husserl; Ideen zu einer Reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Philosophie, § 16.
(12) 以下A、Bはそれぞれ『純粹理性批判』の1版、2版のこと、その他の頁づけはアカデミー版による。ローマ数字はその巻数、アラビア数字はそのページを示す。
(13) カントは物理学に原理として含まれているアプリアオリな綜合判断の例として『純粹理性批判』では「物体界の一切の変化において、物質の量は不変である」や「運動の一切の伝達において、作用と反作用はつねに相等しくなければならぬ」をあげ(B. 17~8)『プロレゴメナ』では物理学の原則の例として「実体は常住、不変である」や「生起する一切のものはつねに原因によって、恒常的法則にしたがいあらかじめ規定されてゐる」をあげてゐる(Prolegomena § 15)。先の二つは物理学における原理や公理であり、後にみるようにカントの言葉では自然の形而上学に属し、後の二つは実体や因果の原則であり、一般形而上学に属す。なお初めにあげられた判断中の「物質の量」 \checkmark とは、ニュートンの『自然哲学の数学的原理』の定義Iでは、「物質の密度と体積をかけて得られる物質の測度」とされ、質量のことである。したがって先のアプリアオリな綜合判断は「質量不変の原理」 \checkmark を意味する。
(14) 先験的概念として、物一般のほかに、實在性、実体、力等があげられている(B. 750)。
(15) 1版では「対象ではなく、対象一般のアプリアオリな概念にかかわる認識を先験的と名づける」(A. II~5)とゞわれてゐる。
(16) 量のカテゴリーについては、空間・時間のアプリアオリな直観が与えられる。
(17) ただし人間の目的な在り方や芸術的美的な経験などは別である。
(18) Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft.
(19) 注(3)参照。なお特殊相対性理論によると、質量とエネルギーは相互轉換可能となり、質量保存則はそのままでは保てなくなる。それは質量を実体の指標のごとく考えるカントのここでの考えの修正を要求することであり、物理学の基礎理論に形而上学的背景があるといふことでのカントの思考法の破棄すべきことを意味しない。序にもう一つつけ加えておけば、カントの実体の原則の要点は質量保存則のような物理学の原理を根拠づけるといふことだけでなく、カント以前の哲学の通説であつた精神が実体的であるといふ考えの成り立ちえないことを示すことにもある。